

所得で分極化 活力奪う

朝日 8月28日オピニオン「TOKYOの未来は」の社会学者・橋本健二さん表題の発言に注目したので抜粋して紹介する。

東京は、日本における所得格差が象徴的に表れている都市だと言えます。他の道府県でせいぜい2倍程度におさまる市区間の所得格差は、東京では約4倍にもなります。特筆すべきは、最も豊かな人たちと最も貧しい人たちが、わずか数^{キロ}という近距離に住んでいる点です。

その居住地域は、地形と関係しています。低地の下町には低所得者、都心や台地の山の手には富裕層が住む傾向が鮮明になっている。住んでいる地域をみれば、社会の中で自分がどのポジションにいるのかがわかってしまう。欧米の都市によくみられる、所得による居住地域の住み分けは東京でも起きているのです。

私は、こうした都市の「分極化」が、都市としての活力をそいでしまうのではないかと懸念しています。予想されるのが、格差に応じた地域間の利害対立が顕在化することです。私の研究では、所得階層による考え方の違いが明らかになっています。収入の多い人ほど格差を是認し、所得の再分配に否定的になっている。富裕層ほど自己責任論を支持する傾向が強まっているのです。

貧困家庭が多い地域では、負の近隣効果も見受けられます。周囲の住民の意識や行動に影響を受けて、教育への投資を減らしたり、大学進学を諦めたりする傾向がある。地域の大学進学率が下がれば、格差は世代を超えて固定化することになる。ひいては有能な人材が埋もれ、経済成長を引き下げることにもつながるでしょう。

いま臨海部にはタワーマンションが林立していますが、高齢化が進む東京の将来を考えると、多様な人たちが住めるソーシャルミックスなまちづくりを心がけるべきです。都心には、高級スーパーしかなく、フードデザート（食品砂漠）とも呼ばれる地区があります。年金生活者になったとき、こんな街で暮らすのは難しいでしょう。

一方、高円寺や経堂といった高級住宅と木造アパートが混在する地区には庶民的な商店街や居酒屋があり、収入が下がっても住み続けられる。こんな雑然さが、街には不可欠なのです。山の手には下北沢などの個性的な街がありますが、下町も含めた各地区で文化の発信力を強め、魅力的な街をつくっていく必要があります。

これを読んで、写真の橋本さん『階級都市—格差が街を侵食する』を思い起こした。第5章「階級都市を歩く」六本木ヒルズから湾岸へ、別世界をつなぐ文京区の坂道など、実際に歩きたくなります。本書は「階級都市から交雑都市へ」と提言しています。今後も、五輪・パラリンピック後の東京を見つめていきたい。退職後には、東京にもなかなか行くことができないが。



(2021年9月2日)